



▲信楽汽車土瓶

甲賀市の文化財②7

きしやどびん
信楽汽車土瓶

明治時代鉄道の開通によって列車での旅が可能になると、車内で食べるお弁当やお茶が販売されるようになりました。お茶の販売に用いられた専用の容器を汽車土瓶といい、信楽焼の窯場でも生産されてきました。信楽焼古窯跡の調査では多くの汽車土瓶が出土しており、その

変遷をみる事ができます。信楽焼の汽車土瓶が登場したのは明治20年代、大津の弁当業者が神山村の窯元に依頼したのが始まりだと伝えられています。当初は、以前から作られていた土瓶を小型にしたものでした。

明治30年代から大正10年頃には販路が全国に広がり、形は初期のものから一回り小さくなり、湯飲みがセットになりました。また、駅名や弁当屋の名が入り、細部が簡略化され大量生産されるようになりました。

大正時代中期、信楽での汽車土瓶の生産は最盛期を迎え、神山だけで汽車土瓶にかかわる業者は30軒ほどあったようです。ところが、大正末期のガラス茶瓶の登場により、汽車土瓶の生産地は大打撃を受けました。信楽で汽車土瓶生産が復活するのは昭和5年になってからです。この頃から、手回しロクロから石膏型機械ロクロによる成形へと変わっていきま

リエチレン容器が登場し、次第に移行していくようになります。信楽では泥漿鑄込成形による改良が行われますが、汽車土瓶の生産は昭和40年代には終わりを迎えることになりました。

鉄道の発展とともに全国に運ばれた汽車土瓶。この小さな土瓶が生み出された背景には、古くから培われた技術力や地理的要因などがありますが、鉄道やお茶とゆかりの深い信楽ならではの所産といえるのではないのでしょうか。

秋季企画展 「信楽汽車土瓶」

【期間】10月20日(土)～12月2日(日)

【場所】土山歴史民俗資料館

信楽での発掘資料を中心に、信楽汽車土瓶の変遷を紹介します。

問い合わせ
土山歴史民俗資料館
☎ 66-1056
FAX 66-1067

80年代から進んだほ場整備により小規模で不整形な田は一掃され、近年では

1ヘクタール区画の田も普通に見られます。機械化の進展や担い手の変化が事業の推進力となりましたが、農村景観も大きく変わりました。

ところで古代にも大きな土地区画整備が全国規模で進められました。それが

市史の小径

第24回

条里制と甲賀

～古代のほ場整備～

「条里制」です。一辺約100メートルの正方形の区画を基本に規則正しく田が並ぶだけでなく、「何条何里何坪」といえば、その場所が明確になる土地区画と住所表示がセットになる優れた方法でした。

条里地割は一般に国や郡ごとの統一性があり、甲賀郡では野洲川の下流から一条がはじまり、その東端は二十九条にいたりました。市史では条里制が施行された代表的な地域を分析しその特徴を明らかにしています。

条里地割は用水管理や牛馬耕に適し、道路や集落や町もこれに従って発展したことから、1000年にわたって暮らしの基盤となったといえます。古代人のスケールの大きさに驚かされます。



▲典型的な条里地割(水口町北脇)

問い合わせ 歴史文化財課 市史編さん室
☎ 86-8075 FAX 86-8216